株式市場新聞
www.marketpress.jp
2022
8/8
月曜日
発行元　株式会社 株式市場新聞社
〒530-0005
大阪市北区中之島４－２－２８甲南アセット中之島ビル
TEL 06-6105-1904

日経平均株価
２万８１７５円８７銭
▲２４３円６７銭（前日比）
ＴＯＰＩＸ
１９４７．１７
▲１６．４４（前日比）

エネルギー確保は急務

最需要期の冬に向け脱ロシア

ロシアによるウクライナ侵略により急騰したエネルギー価格は、主要国が実施した金融引き締めによる景気減速懸念などで下落に転じている。しかし、依然として懸念が強いのが天然ガス。ロシアが欧州へ供給するパイプライン「ノルドストリーム」が通常より６０％削減されているうえ、日本企業が出資するサハリン２ではロシア政府の管理下に置く大統領令が発令されている。最需要期の冬へ向け供給が懸念されるなか、改めて脱ロシアの動きが高まろう。

中長期視野でプラント建設

ロシアによるウクライナ侵略が想定以上に長期化し、欧米各国の制裁とともにロシアも対抗手段として資源供給の縮小に動きだしている。特にその中で欧州は天然ガスのロシア依存度が高いことから、米国やカタールからの輸入を増やすなどサプライチェーンの再構築を急いでいる。

一方、日本についてもサハリン２の動向は不透明であることから、目先のみならず中長期的視野にたてば供給を安定化させるうえで、プラント建設を進めて脱ロシアを進めることになろう。

横浜港に停泊するＬＮＧ船

日揮ホールディングス（１９６３）…総合エンジニアリングで国内トップ。液化天然ガス製造プラントに強みを持つ。

ＩＨＩ（７０１３）…航空エンジン、大型ボイラー、ターボチャージャーなど様々な産業機械を製造。ＬＮＧ向け貯蔵タンクでは世界シェア２割強を占める。

明星工業（１９７６）…熱絶縁工事に強い建設工事会社で海外ＬＮＧ出荷基地工事で豊富な実績。

ＩＮＰＥＸ（１６０５）…原油・ガス開発生産国内最大手で政府が黄金株保有。豪州でＬＮＧプラント「イクシス」を操業している。

クリヤマホールディングス（３３５５）…ゴム、合成樹脂製ホースを日米欧で展開、シェールオイル向け採掘用ホースの需要増が期待される。

日経平均の日足チャート

7月第4週の動意銘柄

PSS買い気再燃

サル痘感染で緊急事態宣言

週明け25日、**プレシジョン・システム・サイエンス**（7707）が急反発。世界的なサル痘の感染拡大を受け、世界保健機関（WHO）が緊急事態を宣言したことでサル痘ウイルスDNAリアルタイムPCR検査キット扱う同社株に買い気が再燃した。

また、厚生労働省が専門部会で天然痘ワクチンをサル痘予防に使うことの可否を審議すると伝わったことを受け、子会社のKMバイオロジクスがワクチンを生産する**明治ホールディングス**（2269）も関心を集めた。

東京製鐵は軟調

東京製鐵（5423）が軟調。23年3月期の業績予想について、売上高で4000億円から3960億円（前期比4・2％増）へ減額する一方、営業利益で300億円から390億円（同22・7％増）へ上方修正した。主原料の鉄スクラップ価格が4～6月期の実績を下回ると想定されるが、販売価格の値上げが反映される。

WSCOPE上方修正

26日、**ダブル・スコープ**（6619）が急反発。22年12月期の業績予想について、連結売上高で380億円から440億円（前期比46・8％増）へ、営業利益で50億円から55億円（同2・9倍）へ上方修正した。民生系用途と車載系用途ともに主要顧客の需要が安定して伸び、販売数量が期初計画を10％程度上回った。

KOA増額配当引上げ

KOA（6999）が急伸。23年3月期の業績予想について、連結売上高で713億円から728億円（前期比12・8％増）へ、営業利益で64億円から98億円（同71・3％増）へ上方修正、年間配当を40円から50円（前期36円）へ引き上げた。為替レートの円安の影響や製品ミックス、原価改善などが寄与している。

オーバル急騰劇続く

オーバル（7727）が大幅高で新値追い。豪州アントンパール社による株式大量取得を手掛かりにストップ高を交え急騰劇が続いており、12日時点の保有比率は7・29％にまで高まっており、20日に会社側は大規模買付行為などに関する対応方針の導入した。

コンドームはサル痘予防

不二ラテックス（5199）がストップ高、**オカモト**（5122）や**相模ゴム**（5194）も値を飛ばした。国内でも感染者が確認されたサル痘について、性的接触を含む体液や血液からの感染が指摘されていることから、コンドームを製造販売する3社に資金が流入した。

栄研化2Q計画ほぼ達成

27日、**栄研化学**（4549）が急伸、年初来高値を更新した。23年3月期第1四半期の連結営業利益が27億9900万円（前年同期比8・0％増）と2Q累計計画の28億2000万円（同41・6％減）をほぼ達成。免疫血清検査などが好調で、遺伝子関連分野で一過性の特許料収入が発生した。

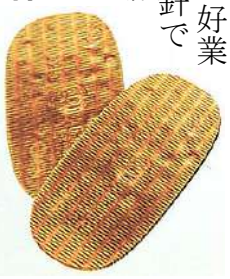
正直じいさんの株で大判小判

好決算のグロース狙う

前週の東京市場は反発。日経平均は週間で374円上昇しています。週末に米雇用統計の発表を控え様子見ムードが強いなか、米ペロシ下院議長台湾訪問による米中対立激化を懸念して急落する場面がありましたが、その後は持ち直し、週末は上値の壁として意識されていた2万8000円を大きく上回ってきました。過度なインフレや急激な米利上げ観測が徐々に後退しており、米長期金利が低下し円安がピークアウト、NY原油先物も半年ぶりの安値を付けています。

ただ、5日に発表された米7月雇用統計が予想を大きく上回ったことで、再び大幅利上げ継続への警戒感が広がっており、慎重に対応する必要がありそうです。引き続き決算内容をチェックしながら、グロースを中心に好業績銘柄で値幅を狙う方針ですが、米金利と米株市場の動向を確認しながら、買い場を探りたいと考えています。

花咲 翁

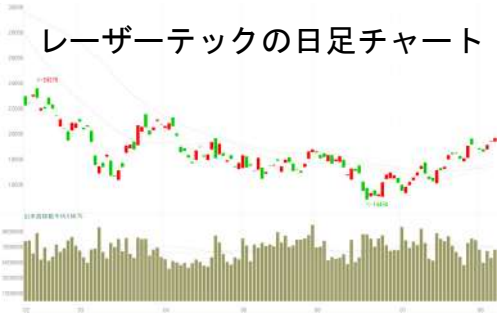


半導体上昇目立つ

米上院で補助金法案可決

27日、レーザーテック（6920）や三井ハイテック（6966）、東京エレクトロン（8035）、ルネサスエレクトロニクス（6723）、アドバンテスト（6857）など半導体関連株の上昇が目立った。決算を発表したテキサス・インスツルメンツやアルファベット、マイクロソフトが時間外で上昇、ナスダック100先物が高く、米上院で半導体製造関連に2800億ドルの補助金を出す法案が可決されたことでで半導体設備投資拡大も期待された。好業績と増配を発表した信越ポリマー（7970）が続騰するなど周辺銘柄にも買いが広がった。

レーザーテックの日足チャート



小糸製は下方修正

28日、小糸製作所（7276）が大幅続落。23年3月期の連結営業利益予想を670億円から590億円（前期比10・4％増）へ下方修正した。

公開価格の2・3倍

unerryの初値

unerry（5034）が東証グロース市場に新規上場、公開価格1290円の2・3倍となる3000円で初値をつけた。人流データビッグデータプラットフォーム運営、小売・メーカー・自治体へのデータ分析や広告サービスの提供する。

Wスコープ上場延期

ダブル・スコープ（6619）が急反落、一時ストップ安まで売られた。韓国連結子会社W-SCOPE CHUNGJU PLANTの株式上場延期が伝わった。ただ、会社側が上場を8月から9月に延期すると正式に発表すると、不透明感が後退し急速に下げ幅を縮めた。

公開価格45％上回る

HOUSEIの初値

HOUSEI（5035）が東証グロース市場に新規上場、公開価格400円を45％上回る580円で初値をつけた。情報システム開発・運用・保守と自社開発情報システム・ソフト・クラウドサービス、中国向け日本製品販売とクラウドサービスを提供する。

～決算情報～

カプコン

未発表で大型タイトル予定

第1四半期大幅減収減益も想定内

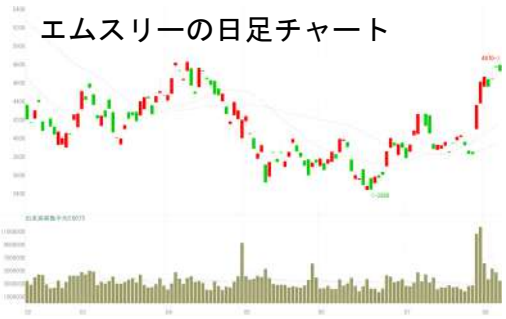
カプコン（９６９７）の今２３年３月期の第１四半期（４～６月）は、連結売上高で２５２億３２００万円（前年同期比４７．９％減）、営業利益で１２０億６１００万円（同４８．９％減）となった。前年同期は超大型タイトル「バイオハザードヴィレッジ」などが計上されており、大幅減収減益はその反動。

６月末に発売の「モンスターハンターライズ：サンブレイク」が第２四半期以降寄与するうえ、（**野村 謙吉取締役専務執行役員　最高財務責任者（ＣＦＯ）**は「バイオハザード４リメイク版以外にも未発表で１００万本以上が見込めるタイトルも予定」とし、通期の売上高１２００億円（前期比９．０％増）、営業利益４８０億円（同１１．９％増）の期初予想達成に意欲を見せる。

エムスリーは急反発

1Q実質2割超の営業増益

２８日、**エムスリー**（２４１３）が急反発。２３年３月期第１四半期の連結営業利益は１８６億９５００万円（前年同期比２４・２％減）だったが、前年同期に海外の特殊要因による利益計上があり、実質では２割超の増益で、コンセンサスも上回った。新型コロナ関連治験やワクチン接種支援プロジェクトが増えた。米グロース株高も追い風。



公開価格14％上回る

エアクロゼットの初値

週末２９日、**エアークローゼット**（９５５７）が東証グロースに新規上場、公開価格８００円を１３・８％上回る９１０円で初値をつけ、１０６０円ストップ高まで買われた。月額制ファッションレンタルサービス「airCloset」の運営を行う。

アドバンテ増額自社株買い

アドバンテスト（６８５７）が急反発。２８日引け後、２３年３月期の連結業績予想について、売上高を５１００億円から５５００億円（前期比３１・９％増）、営業利益を１５００億円から１７００億円（同４８・２％増）に上方修正した。短期的に民生品半導体は伸び悩むものの、高性能半導体の伸びや円安を加味した。収益上振れに伴い第２四半期末配当を６５円（前年同期５０円）へ増配する。併せて、発行済み株式数の５・３％にあたる１０００万株、５００億円を上限にした自社株買いを発表したことも好感された。

NEC1Q赤字転落

ＮＥＣ（６７０１）が大幅続落。２８日取引終了後に発表した２３年３月期第１四半期の連結決算は、営業損益１５３億４１００万円の赤字（前年同期１１億３３００万円の黒字）に転落したことを嫌気した売りがかさんだ。前年同期に大型案件があった社会公共・ネットワークサービスの落ち込みが響いた。ただ、受注残は豊富で円安もプラス要因になることから、通期は１８５０億円（前期比８・２％増）と増益予想を据え置いた。

転ばぬ先のテクニカル

サマーラリースタート

先週の東京株式市場は反発し２万８０００円台を回復しました。

今年は年明けからの急落で日経平均は３月９日に２万４６８１円まで急落しました。その後のリバウンド局面では３月２５日に２万８３３８円まで上昇しましたが、この時は２００日線（当時２万８２７４円）で戻り一杯となり、５月１２日の２万５６８８円まで下落しました。この安値からのリバウンド局面では６月９日の２万８３８９円までありました。この時は２００日線（当時２万７９３９円）を超えましたが、３日天下でその後急落。６月２０日には２万５５２０円まで下落しました。

今回、２００日線を突破したのは７月２０日で、その後１２日間２００日線上をキープしエネルギーをため込んできました。そしていよいよ上放れへと移りだしたようです。６月９日～１０日に残した窓埋め完了から一段高予測です。

サマーラリースタート。**日々勇太朗**

～決算情報～

三相電機

第1四半期営業増益確保

増収効果で原料高と経費負担吸収

三相電機（６５１８）の２３年３月期第１四半期の連結決算は、売上高４４億６７００万円（前期比１７．２％増）、営業利益２億４６００万円（同１．６％増）、最終利益２億２１００万円（同１２．４％減）で着地した。

半導体製造装置用ポンプが引き続き拡大、工作機機械向けモータも省力・自動化投資需要を背景に堅調で、増収効果により原材料価格高騰とサプライヤーの複数、地域分散化など部材調達柔軟化へ向けた経費負担を吸収し営業増益を確保した。最終減益は前年同期に固定資産売却益を計上していたため。

通期は売上高１７２億円（前期比０．６％増）、営業利益９億７０００万円（同２０．３％増）、最終利益７億３０００万円（同１７．５％減）と従来予想を据え置いた。

日本精線

第1四半期32％営業増益

高機能の独自製品へ強い需要継続

日本精線（５６５９）の２３年３月期第１四半期の連結決算は、売上高１２２億１７００万円（前年同期比１４．８％増）、営業利益１６億３２００万円（同３１．８％増）、最終利益１１億７６００万円（同２８．３％増）と２ケタ超の増収で利益が大幅に拡大した。

半導体関連業界向け超精密ガスフィルター「ＮＡＳｃｌｅａｎＲ」や太陽光発電パネルなどの製造プロセスで使われる極細線をはじめ、高機能の独自製品の需要が引き続き強く、ニッケル価格高騰に伴うステンレス鋼線の製品と仕掛品の評価差益も利益を押し上げた。

通期は売上高４８５億円（前期比８．３％増）、営業利益４４億円（同４．３％減）、最終利益３０億８０００万円（同３．１％減）と前回予想を据え置いた。

8月第1週の動意銘柄

ソニーGは急反落

G&NS不振で下方修正

週明け1日、**ソニーグループ**（６７５８）が急反落。２３年３月期の業績予想について、連結売上高で１１４０億円から１１５０億円（前期比１８・７％増）、営業利益で１１６億円から１１１億円（同３７・２％増）へ下方修正した。映画、エンタテインメント・テクノロジーなどは計画を上回るが、ゲーム&ネットワークサービス（G&NS）が下回る。

ソニーGの日足チャート

ユナイテッド海S高

NSユナイテッド海運（９１１０）が、ストップ高。２３年３月期の業績予想について、連結売上高で１９００億円から２１７０億円（前期比１０・７％増）へ、営業利益で２１０億円から２９０億円（同８・６％増）へ上方修正した。ドライバルク市況は足元まで高水準を維持、為替レートが想定よりも円安に進んだ。

ハリマ化上方修正

ハリマ化成グループ（４４１０）が一時ストップ高。２３年３月期の業績予想について、連結売上高で８８０億円から９９０億円（前年同期比３０・１％増）、営業利益で２０億円から２７億円（同１６・９％減）へ上方修正した。欧米で粘接着剤用樹脂などの増加が見込まれる。

JSRストップ安

２日、**JSR**（４１８５）がストップ安まで売られ年初来安値を更新。２３年３月期第１四半期の連結決算は営業利益７２億６７００万円（前年同期比３４・８％減）と市場予測を下回り大幅減益で着地、通期予想を５７５億円から５６０億円（前期比２８・０％増）に下方修正した。フラットパネルディスプレイ市況が軟化、先行投資負担や一時費用も収益を圧迫した。

～決算情報～

ハリマ化成グループ

23年3月期は大幅上方修正

欧米で粘接着剤用樹脂需要拡大

ハリマ化成グループ（４４１０）の２３年３月期第１四半期の連結決算は、売上高２２１億８４００万円（前年同期比２７．１％増）、営業利益１３億４０００万円（同６７．２％増）と計画を上回って着地。第２四半期累計計画について、売上高を４４０億円から４６０億円（同２６．６％増）、営業利益を１０億円から１９億円（同２．５％減）へ、通期は売上高を８８０億円から９９０億円（同３０．１％増）、営業利益を２０億円から２７億円（同１６．９％減）へ大幅に上方修正した。欧米で粘接着剤用樹脂などの需要が拡大、売上高が予想以上に増え、利益も前回の予想を上回る。

併せて、年間配当を４２円（前期３８円）へ増配、発行済株式総数のの３．９７％にあたる１００万株の自社株買いも発表した。

あじかん

1Q営業黒字1億1600万円

仕出し・給食需要回復し原価率抑制

あじかん（２９０７）の２３年３月期の第１四半期は、連結売上高で１１２億１００万円（前年同期比６．６％増）、営業利益１億１６００万円（前年同期１億１６００万円の赤字）、純利益２億５３００万円（同５９００万円の赤字）となった。行動制限の緩和により、仕出し・給食業態の需要が回復基調にあることに加え、地域密着型営業の推進を行ったことが寄与。鶏卵の仕入価格が高止まりしたことや、ユーティリティコストの上昇があったが、生産稼働率の向上に加え、歩留まり率の改善などにより、製造原価率の上昇を抑制した。

通期は売上高４７０億円（前期比３．７％増）、営業利益で６億円（同７．１％増）、純利益で５億円（同２１．３％減）の従来予想を据え置いている。

TDKマド空け急伸

予測上回り4割超の営業増益

ＴＤＫ（６７６２）が２日、マドを空けて急伸。２３年３月期第１四半期の連結決算は、営業利益が６６億３４００万円（前年同期比４２・４％増）と市場予測を上回る大幅増益で着地したことを好感した買いを集めた。セラミックコンデンサやアルミ電解コンデンサが自動車や産業機器向けに大きく伸び、センサ応用製品も増加、円安効果も収益を押し上げた。

公開価格20％上回る

日ビジネスシステムズ

日本ビジネスシステムズ（５０３６）が東証スタンダード市場に新規上場、公開価格１５２０円を２０％上回る１８２７円で初値が生まれた。同社はマイクロソフト製品を中心とした、ＤＸ計画策定からクラウドによる効果創出までの一貫したＩＴサービスの提供を行う。

サンリオ上方修正増配

３日、**サンリオ**（８１３６）が急反発、年初来高値を更新した。２２年３月期の業績予想の修正を発表、連結売上高で５４６億円から５７４億円（前期比８・８％増）へ、営業利益で３０億円から４７億円（同８５・２％増）へ上方修正、年間配当を１６円から２０円（前期１６円）へ引き上げた。海外や国内需要が計画策定時の想定より堅調に推移したことや中期経営計画に沿った構造改革の実行による売上原価率の低減などが寄与している。

ケーズHD4割営業減益

ケーズホールディングス（８２８２）が急落。２３年３月期第１四半期の連結決算は、営業利益は６８億９５００万円（前年同期比３９・７％減）と大幅減益で着地したことが嫌気された。一部商品の引き渡しと設置工事の期ずれや広告宣伝費や修繕費の増加が減益要因。通期計画の４３０億円（前期比３・０％増）を据え置いたが、１Ｑの不振で計画未達成が懸念された。

～決算情報～

ＴＯＡ

1Q原料、輸送コストが圧迫

インドネシアやタイが伸び増収確保

ＴＯＡ（６８０９）は２３年３月期第１四半期の連結決算は、売上高９０億８４００万円（前年同期比９．８％増）、営業損益３億２００万円の赤字（前年同期５２００万円の赤字）、最終損益２億６７００万円の黒字（同１億４００万円の赤字）で着地した。

インドネシアで宗教市場向けが大きく伸び、タイで新規開業の商業施設向けの納入が進んだほか、欧州や中東、米国向けも堅調に推移したが、原材料価格や輸送コストの上昇が損益を圧迫した。

通期は売上高４４０億円（前期比７．７％増）、営業利益２９億円（同３４．３％増）、最終利益２２億５０００万円（同５３．４％増）と従来予想を据え置いた。配当は第２四半期末、期末を合わせ年間４０円（前期２０円）を計画。

荒川化学工業

第1四半期原材料高響く

ベトナム生産開始で売上げは伸びる

荒川化学工業（４９６８）の２３年３月期第１四半期の連結決算は、売上高２１１億６１００万円（前年同期比７．７％増）、営業利益５億７１００万円（同６６．４％減）で着地した。

印刷インキ用樹脂や塗料用樹脂、精密研磨剤や紙おむつ向け接着剤、電子材料用配合製品の販売が堅調に推移、ベトナムで紙力増強剤の生産を開始したことから売上高は伸びた。ただ、ロジンや石化原料などの原材料価格の大幅な上昇、特に欧州における天然ガスの高騰が収益を圧迫した。

通期は売上高９００億円（前期比１１．８％増）、営業利益１６億円（同５１．６％減）と従来予想を据え置いた。配当は第２四半期末、期末各々２４円、年間４８円を継続する。

イリソ電子一時S高

コンセンサス上回り2桁増益

３日、イリソ電子（６９０８）が急伸。一時ストップ高まで買われた。２日引け後に発表した２３年３月期第１四半期の連結決算は、営業利益１３億９８００万円（前年同期比１０・６％増）とコンセンサスを上回る２ケタ増益で着地したことが好感された。電動化関連でパワートレインの販売が拡大、インダストリアル市場向けも好調で、為替が大幅な円安で推移したことも収益を押し上げ、中国ロックダウンによる上海生産子会社の稼働停止や原材料価格の高騰の影響を吸収している。

Mimaki22%営業増益

４日、ミマキエンジニアリング（６６３８）がストップ高。２３年３月期の業績予想について、連結売上高で６５６億円から６９１億円（前期比１６・１％増）、営業利益で２３億３０００万円から２５億６９００万円（同２１・８％増）へ上方修正した。ＳＧ、ＩＰ、ＴＡの各市場で新製品が順調に販売を伸ばすとともに、インクや保守部品販売も好調に推移している。

トヨタ増額も小幅

トヨタ自動車（７２０３）が反落。２３年３月期通期の最終利益を２兆２６００億円から２兆３６００億円（前期比１７・２％減）に上方修正した。ただ、想定為替レートを１ドル１１５円から１３０円と円安へ見直したことによるもので小幅でサプライズに乏しく、手じまい売りが優勢になった。

日東紡経常益2.2倍

日東紡績（３１１０）が急伸。２３年３月期第１四半期の連結決算は、経常利益３５億９４００万円（前年同期比２・２倍）と計画を上回り、第２四半期累計予想を３４億円から５０億円（前年同期比２８・１％増）へ上方修正した。スペシャルガラス・クロスが伸び、為替差益も利益を押し上げる。

～決算情報～

タキロンシーアイ

中国、アジアの回復遅れる

23年3月期1Qは減収減益で着地

タキロンシーアイ（４２１５）の２３年３月期の第１四半期（４～６月）決算は、連結売上高で３５３億１２００万円（前年同期比１．５％減）、営業利益で１４億４５００万円（同５１．３％減）、純利益で７億６８００万円（同６４．５％減）となった。住設建材の床・建装事業では欧州の減速と中国、アジアの回復遅れが影響し、環境資材のインフラマテリアル事業では、業界全体に新型コロナによる土木工事の発注数が減少、高機能材事業ではマイクロモータは上海ロックダウンにより２カ月間に亘る操業停止を余儀なくされた影響により低調に推移した。通期は売上高１５００億円（前期比５．７％増）、営業利益で８２億円（同５．２％減）、純利益で５４億円（同１８．９％減）の従来予想を据え置いた。

英　和

今期15％営業増益見込む

DXやセキュリティ関連受注など拡大

英和（９８５７）の２３年３月期は、連結売上高で４００億円（前年同期比７．０％増）、営業利益で１８億円（同１５．２％増）、純利益で１２億円（同１２．５％増）と２ケタ増益を見込んでいる。設備稼働率の上昇や機器の更新需要を取込み、建設機械業界、機械業界、電気機器・精密機器業界、舶用関連業界、電力業界向けの販売は堅調に推移している。

今後は生産性向上や業務効率化を目的としたデジタルトランスフォーメーション（ＤＸ）の推進、２０５０年カーボンニュートラル社会の実現に向けた新技術開発のための研究開発投資、セキュリティ対策への投資、環境・安心・安全・品質の向上や増加する自然災害に対する防災・減災、国土強靭化に関連する設備投資に絡む受注拡大を見込んでいる。

大チタはS高で新値

今期19億1400万円の営業黒字

週末５日、**大阪チタニウムテクノロジーズ**（５７２６）がストップ高まで買われ年初来高値を更新した。未定としていた２３年３月期の業績予想を発表、連結売上高で４１０億円（前期比４３・６％増）、営業利益で１８億円（前期１９億１４００万円の赤字）と黒字転換を見込んだ。チタン事業における販売数量の増加と販売価格是正や操業改善といった収益改善を見込んでいる。

アイロムG営業益４倍

アイロムグループ（２３７２）がストップ高で年初来高値を更新。２３年３月期第１四半期の連結決算は、売上高４７億９２００万円（前年同期比４１・４％増）、営業利益１４億４９００万円（同４・１倍）と大幅増収で利益が急拡大した。既存、新規の大型案件が売上に貢献、新規試験の受託やｉＰＳ細胞培養上清液を原料とした製品の受託製造も伸びている。通期は売上高１６５億円（前期比５・１％増）、営業利益３０億円（同８・５％増）と従来予想を据え置いたが、通期計画に対する１Ｑの営業利益進捗率は４８％に達し収益上振れが期待された。

BEENOS47％減益

ＢＥＥＮＯＳ（３３２８）が急落。２２年９月期第３四半期累計の連結決算は、営業利益は５億７３００万円（前年同期比４７・４％減）で着地、直近３カ月の４～６月期は８割を超える大幅減益になっており、一段の減速を懸念した売りに値値を崩した。投資先の損失引当を計上たことでインキュベーション事業の赤字幅が拡大した。

公開価格７％上回る

クラシコムの初値

クラシコム（７１１０）が東証グロース市場に新規上場、公開価格１４２０円を７％上回る１５２０円で初値が生まれた。ＥＣサイト「北欧、暮らしの道具店」で服飾雑貨などの販売事業を手がける。

～決算情報～

ステムセル研究所

第1四半期47％営業増益

デジタルマーケとさい帯血保管が貢献

ステムセル研究所（７０９６）の２３年３月期第１四半期の単体決算は、売上高４億９２００万円（前年同期比１６．２％増）、営業利益７３００万円（同４６．７％増）で着地した。デジタル・マーケティング活動の強化と前年４月から開始した日本初のさい帯保管サービスの貢献により、第１四半期累計期間として過去最高の売上高を計上、増収効果で利益が大幅に拡大した。

今後の検体数増加に備えて、従来の３倍の規模に対応できる横浜細胞処理センターと第二保管センター運用を強化しており、通期は売上高２１億４０００万円（前期比２０．１％増）、営業利益３億４１００万円（同５０．４％増）と従来の大幅増収増益予想を据え置いた。

さい帯による小児形態異常など先天性疾患や新しい半月板治療法の開発なども進めている。

日本トリム

第1四半期は8．4％増収

職域販売増え出荷大きく伸びる

日本トリム（６７８８）の今２２年３月期の第１四半期（４～６月）は、連結売上高で４３億３２００万円（前年同期比８．４％増）、営業利益で５億８００万円（同４．２％増）、純利益で３億２７００万円（同５０．８％減）となった。職域販売部門においては、職域セミナー数は前年同期比３２．７％増と回復し、出荷ベースの販売台数は前年同期比３９．６％増と伸長。健康経営提案による企業向けの展開やサッカーなどスポーツ関連分野での展開は順調に拡大している。直接販売部門の体制強化のための採用コスト・人件費が先行したことが圧迫している。

通期は売上高１８１億３０００万円（前期比１１．４％増）、営業利益２５億円（同２５．１％増）、純利益１６億円（同１７．６％減）の従来予想を据え置いた。

潮流

日本の生産性を高めろ!!

内需拡大政策へ大きく舵を切れ

marKet bAnk

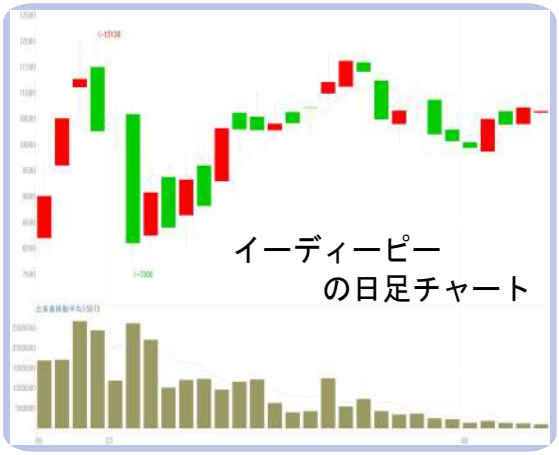
岡山 憲史氏（株式会社マーケットバンク代表取締役）のプロフィール
１９９９年２月日本初の資産運用コンテスト「第１回Ｓ１グランプリ」にて１万人超の参加者の中から優勝。２００２年にＮＨＫ番組「経済最前線」にて独自の投資支援システムが紹介された。直近では２０２２年１月の夕刊フジ主催の「株-１グランプリ」で優勝。週刊現代、週刊ポスト、夕刊フジ、ネットマネー、月刊カレントなど幅広く執筆活動を行う。現在、個人投資家に投資情報サービスを行う。ｈｔｔｐ://ｍａｒｋｅｔｂａｎｋ.ｊｐ

米国の長期金利が急低下し、ドル売り・円買いが急速に進んだ。６月１４日に米１０年物国債利回りは３．４９９％まで上昇したが、８月２日には２．５２％まで低下した。ドル円レートは７月１４日に１ドル＝１３９円３８銭から８月２日には１３０円３９銭まで９円も円高になった。

利上げによる景気減速が米連邦準備理事会（ＦＲＢ）の金融引き締め緩和につながるということで、ヘッジファンドの巻き戻しが入った。今後は利上げの効果や原油価格の急落、ウクライナ産の穀物を運ぶための黒海の回廊が稼働し始めたことによるインフレの沈静化も出て来るだろう。

円安は日本経済にはメリットだ。その最大の理由は、輸出競争力の上昇だ。また、製造業が国内回帰することで、日本経済が活性化するとの見方もある。しかし、円安になっても製造業がかならずしも国内に回帰するとは言えない。

１９７１年のニクソン・ショック以降、為替に影響を受けない経営が日本の製造業の重要な経営戦略となっているからだ。海外で生産して海外で販売した場合、為替は基本的にその国における競争力には影響を及ぼさない。輸出に頼る場合、為替水準により当該国における競争力が深刻なダメージを受ける可能性がある。



イーディーピーの日足チャート

一般に海外での事業が大きくなればなるほど、こうした為替リスクを回避する意図が働く。１９８０年代以降、自動車産業は米国において通商摩擦の影響を強く受けてきた。生産拠点を消費国に作り、現地の人を雇用することで、現地の雇用に貢献し、貿易摩擦を回避している。円安局面において、輸出が価格競争力にプラスであることは間違いない。海外での現地生産・現地販売であっても、売上高、利益は円ベースに換算された段階で膨れるため、会計的には円安メリットを享受できる。

円安で２４００億円超の増益

２０２２年４～６月期決算を発表した主要３４社では、円安による増益効果は２，４００億円を超えた。製造業が国内回帰しないのは日本の生産性が低いからだ。雇用規制が強く労働力が最適配分され難い。また、多くの企業が複合化して選択と集中が進まない。さらに中小企業の延命策により産業の新陳代謝が実現しない。政府はこれらの問題を解決し、内需拡大政策へ大きく舵を切ることが急務である。

潮流銘柄は**イーディーピー**（７７９４）、**ヤーマン**（６６３０）、**マイクロ波化学**（９２２７）

敏腕先物ディーラー

ハチロクの裏話

ハチロクのプロフィール

証券アナリストから証券会社の法人部長を経て、２２５先物オプションディーラーに転身。アナリスト時代に培ったテクニカルやファンダメンタルズなどの分析力を駆使、リーマンショックなどの暴落時も乗り越えて西日本における２２５先物オプションディーラーとしてはトップクラスの運用実績を誇る。

８月は荒れるか？

２万８千円乗せも楽観禁物

先週の日経平均は前週末比約３７４円高となり、週足で３週連続陽線となった。２万８０００円に乗せてくると売りがでるが２万７５００円に近づくと買いが入ってくる方向感の乏しい展開であったが、金曜日には明確に２万８０００円を抜けてきて更なる上昇が期待できるチャートとなってきた。

上昇の背景には米国長期金利の下落や原油価格の下落など過度のインフレ懸念の後退が要因となろうが、キャッシュ比率を高めた過ぎたファンドの打診買いのようにも思われる。インフレの拡大を制御するのは大変難しいが、景気後退であれば経済対策で対処できると見た投資家の先走り買いや売り方の買戻しも入り心理的な節目の２万８０００円を抜けてきた。

だが「過度のインフレ懸念」が後退しただけで、今後も懸念が再発する可能性は高い。特に８月相場は荒れやすいアノマリーがあるので注意したい。過去２０年間の日経平均株価の８月月間上下は９勝１１敗と１２カ月中最下位である。しかも大きく下落するケースが多い。

２０１５年の人民元ショックでは８・２％下落、２０１１年の米国国債格下げショックでは８・２％下落、１９９８年ロシア危機では１３・９％下落した。長期休暇に入る投資家が多く流動性が乏しくなるのが要因とも言われているが、８月は「動きやすい月」と思っていたほうがいいだろう。

チャート的には木曜日の高値十字線を金曜日には上で反応し、強い相場を示唆している。抵抗ラインであった５２週移動平均線（２万７８１３円処）も明確に抜け、下落時に付けた窓（２万８１８９円３５銭）も全て埋めてきた。

２５日移動平均線との乖離率は３・７１％、騰落レシオは１２２％とまだ大きな過熱感は見られない。６月９日の戻り高値（２万８３８９円７５銭）抜きがターゲットとなり、買いが集まりやすいチャートとなっている。

景気後退懸念が強く残る中での上昇ゆえに不安な上昇であり、売り方の仕込み場としての相場とも見て取れる。上昇期待は強いがその後の反転にも注意したい。

上値メドは６月９日の戻り高値（２万８３８９円７５銭）、週足一目均衡表の雲の上限（２万８４２０円処）、節目の２万８５００円があげられよう。一方、下値は節目の２万８０００円、５日線（２万７８８８円処）、２００日移動平均線（２万７５５９円処）が意識されよう。

今週は４日立ち合い。レンジは２万７６００円から２万８５００円を想定する。

（ハチロク）

２万８０００円乗せも楽観は禁物？

WTI原油先物の日足チャート

日経225先物の日足チャート

星野三太郎の株街往来

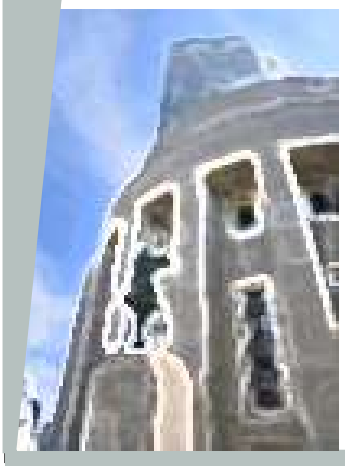
～日々努力するしかない～

新型コロナの感染急拡大や自民党議員との旧統一協会の関係とともに話題になったのが芸能人の投資トラブル。

数十年前なら「数年後に上場するから株券を買わない？」といった未公開株への投資によるトラブルが問題になった時期があったが、現在では仮想通貨やＦＸが主流になっている。仮想通貨ではビットコインが指標的存在になっているが、「玄人筋でひそかに話題になっている新たな仮想通貨を買わない？」とか、ＦＸで多かったのが自動売買だったと思う。

自動売買だから「素人でも放置してて大丈夫」と誘われてた方も多かったと記憶するが、大半は大損をするパターンになる。様々な投資や運用があるが、楽をして利益を得ることなんて難しい。知人が儲けているからと言って、同じようできるなんて不可能だ。弊紙のコラムでもチャートの分析を掲載しているが、株式投資においてもこれを会得するのはかなり難しく、それができたとしても、それをもとに利益を得るには経験も必要になる。

結論のところ、運用も自分自身で日々努力するしかないのだ。



企業レター

「非接触操作」などを実演

IoTのコア技術ＥＴ＆ＩｏＴ ＷＥＳＴに出展

立花エレテック

ＩｏＴのコア技術であるエッジテクノロジー”の最先端情報を一望できる関西最大級の総合技術展「ＥＴ＆ＩｏＴ ＷＥＳＴ」が７月２８日と２９日にグランフロント大阪（大阪市北区）で開催され、**立花エレテック**（８１５９）のブースでは「非接触操作」や「画像認識」、「無線／ＩｏＴ」などの最先端のソリューションを公開した。

立花エレテックのブース

同社は単品販売ビジネスに象徴されるモノだけの取引ではなく、モノであるハードにコトであるシステム技術を組み合わせた提案が出来る「技術商社」を志向している。

今回の「ＥＴ＆ＩｏＴ ＷＥＳＴ」では「非接触操作ソリューション」として非接触モニターや非接触スイッチや空中タッチディスプレイ、視線による画面操作などコロナ禍でニーズが急速に高まる非接触操作が可能になるソリューションを実演を交えて紹介。これに加えて、「画像認識ソリューション」では物体検知ソリューション（ＬＩＯＤ）や画像認識・サーマルセンシングソリューション、センサ導入ツール「ＥＧＮＡ」も紹介している。

今年６月２０日に無人航空機（ドローン）の登録義務化が開始され、ドローンに登録記号の表示とロモートＩＤ機能が必要になったことに対応すべく、同社ではＴＥＡＤ社製外付型リモートＩＤを活用したソリューションを公開、「透明ディスプレイ」や「ワイヤレスでドコデモ給電」なども目を引いた。

チャートから読む騰落銘柄

東光高岳（6617）

第１四半期５６．９％営業増益を好感して８月１日に１９７６円の高値を付けるも利益確定売りにスピード調整。１７００円台後半は２５日や５０日線近辺であり、この水準で下げ止まるなら短期リバウンドも。

信越ポリマー（7970）

２３年３月期２割超の営業増益見通しと増配を好感、マド空け急伸のあと２週間の高値保ち合いを経て上放れへ。半導体関連見直しの流れに乗り、１８年１月高値１４２４円抜けから一段高を目指す。

ALサービスHD（3085）

８月１日に２２１３円まで急伸するもその後は５０日線割れまで急落。からあげ専門店「からやま」は競争激化で苦戦、「かつや」も値上げの影響懸念され、２２年１２月期は未達懸念で２０００円割れ懸念も。

WTI原油投信（1671）

６月９日に付けた年初来高値３５７０円で天井感。日足陰転のあと２５日線に上値を抑えられ、下値を切り下げる。ＮＹ原油先物フシ目の９０ドル割れで一段安が濃厚。当面、２５００円近辺までの調整も。

※チャートは日足

記者の視点

相場見通し

米7月CPIを注視

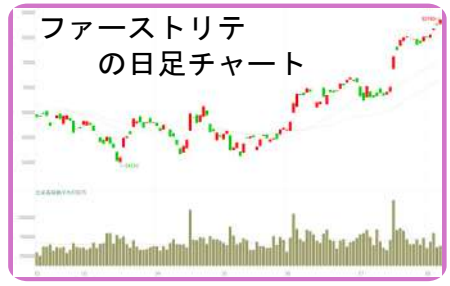
第1四半期決算は終盤戦

8月第1週の東京市場は米国ペロシ下院議長の台湾訪問による中国との軍事衝突を懸念して2日に日経平均で2万7600円割れまで急落する場面があったが、その後は戻す動きとなり、週末5日に日経平均は2万8000円に乗せて引けた。

経済指標に関しては米国7月のISM製造業景況感指数が52・8と市場予想を上回ったものの、6月の53・0より鈍化。これに加えて4日に発表された米新規失業保険申請件数は26万件と予想の25・9万件を上回り、労働市場の悪化が顕在化しているが、複数のFRB高官は9月の利上げにもタカ派的な意見を継続しており、米国経済状況は不透明。それでも米国の主要3指数が上昇基調になっているのは、景況感悪化で利上げペースはピークに近づいているとの見方があるからかも知れない。

主力銘柄では**ファーストリテイリング**（9983）が高値を更新し、第1四半期決算内容が悲観されていた**日本電産**（6594）も上昇基調となっている。今週は8日に**ソフトバンクグループ**（9984）、10日に**ホンダ**（7267）、**資生堂**（4911）など主力企業が続々と第1四半期決算発を迎える。決算内容が好感されれば、それとともに日経平均も更なる上値が期待される。

5日発表の7月雇用統計は予想を大幅に上回ったことから、10日に発表の米7月消費者物価（CPI）次第では更なる利上げ懸念がリスク要因。市場予想は前年同期比8・8%増と6月の9・1%増から伸び率低下が見込まれるが、予想に反して高い伸びなら9月以降の利上げ方針がタカ派な内容になる可能性がある。台湾情勢については中国軍の軍事演習が過激化しない限り再度のリスク要因になる可能性は低い。



当面のスケジュール

- ・5日　米7月雇用統計
- ・7日　中国7月貿易収支
- ・8日　7月景気ウォッチャー調査
- ・9日　7月マネーストック
  7月工作機械受注
- ・10日　7月国内企業物価指数
  7月都心オフィス空室率
  中国7月生産産者物価、中国7月消費者物価
  米7月消費者物価
- ・12日　オプションSQ
  米8月ミシガン大学消費者マインド指数
- ・15日　4-6月期GDP速報値
  中国7月工業生産、中国7月小売売上高、中国7月都市部固定資産投資
- ・16日　6月第三次産業活動指
  独8月ZEW景況感指
  米7月住宅着工件数
  米7月鉱工業生産・設備稼働率
- ・17日　7月貿易収支
  6月機械受注
  米7月小売売上高
  7月26・27日開催のFOMC議事録
- ・18日　米7月中古住宅販売件数
- ・19日　7月消費者物価

編集後記

週末は意外感のある上昇になった。米雇用統計を控え売り先行のあと小高い水準でもみ合っていたが、10時過ぎからスルスルと値を上げ、フシ目の2万800円をあっさり突破、さらに上値を追っている。市況ニュースには「ベアマーケットラリー、どこまで乗っていくべきか」との見出しがあったが、個別で勝負する個人投資家は割り切って乗っていくべきだろう。相場は初動段階よりも最終局面の方が値幅が出やすい。ただ、読み違えをした時の対処方針はあらかじめ決めておきたい。

【ご注意】株式市場新聞は投資の参考になる情報提供を目的としており、投資の勧誘をするものではありません。記事には業績や株価、出来事について今後の見通しを記述したものが含まれていますが、それらはあくまで予想であり、内容の正確性、信頼性、予測の的確性を保障するものではありません。当紙が掲載している情報に基づく投資で被られたいかなる損害について、当社と情報提供者は一切の責任を負いません。投資についての決定はすべてご自身の判断、責任でお願いいたします。